

1 はじめに

本校では、生徒の自主的・実践的な態度の育成や、集団活動を通してより良い人間関係の育成を図ることを目標として積極的な特別活動を推進してきた。感染症流行のため制限していた活動もできるようになってきた。制限する時期があったことで「本当に必要な活動なのか」を十分に精選する意識が生徒・教師に芽生え、委員会活動や行事において、効果と手間のバランスに焦点を当てて活動できるようになってきた。

2 資料

- (1) 3年ぶりに全校集合で対面式(新入生歓迎会)を行った。昨年度までは動画で部活や委員会紹介を行ってきたが、「新入生と在校生が対面する」機会は大抵だとの考えから、実施に至った。在校生にとっても、友達の委員会や部活動に興味をもつ機会となり、全校で活動できることの良さを実感することができた。



- (2) 生徒総会では、常任委員長が活動報告・計画を伝えるプレゼンを作成し、それを用いて説明を行った。プレゼン作成の際、常任委員長は委員会の担当の教員と相談し、生徒に伝わりやすいように表現を工夫したり、キャッチーなスローガンを考えたりした。プレゼン資料の提出はTeamsを使って行い、特活主任が確認しやすいようにした。



- (3) かしわ祭(文化祭)では、入場できる保護者の制限をなくして行った。ステージ専門部、展示発表部、合唱専門部の3つに分かれて活動、発表を行った。ステージ発表では文化的な活動として地域の方を招いて演奏の鑑賞を行ったり、全校生徒が楽しめる取り組みとして多賀中クイズ大会を行ったりした。展示発表では、美術・書写作品や総合学習のレポートなどを展示し、生徒が自由に見られるようにした。美術はデジタル作品の展示をするなど、ICTを効果的に活用した発表に、保護者も感心している様子だった。合唱コンクールも全校で行った。1・2年生はコンクール後の反省作文に「3年生の発表に感動した」と書く生徒が多く、制限なくできたことで得られた感動があった。



3 成果と課題

- 制限なくできるようになった活動が増えたことで、対面で行うことの良さを生徒・教師ともに実感することができた。特に対面式や合唱コンクールは対面でできたことで先輩としての自覚の芽生えや先輩へのあこがれにつながった。
- 特別活動においては、内容の削減を推進し過ぎるとねらいが達成できない。不易と流行及び働き方改革との両立を意識し、企画の立案や引継を行っていきたい。